

アシナガキアリ (*Anoplolepis glacialipes*) に関する情報

○原産地と分布： 明確な原産地は不明、アフリカもしくは熱帯アジア起源とされているが、アフリカ起源の可能性が高い。現在は世界中の熱帯・亜熱帯と北米に広く分布している。

○定着実績： 日本では奄美以南の南西諸島と火山列島に定着している。近年名古屋の温室内でも確認されている。

○評価の理由

海外では高い採餌能力と攻撃性による他種のアリとの競合・駆逐、捕食等による他の動物への影響が知られている。日本でもすでに南西諸島に定着しており、在来の無脊椎動物に捕食や競合により大きな影響を及ぼすおそれがある。

○被害の実態・被害のおそれ

生態系に係る被害

- 捕食による直接的な影響で在来の無脊椎動物に深刻な影響を及ぼす他、鳥の営巣やトカゲ等の爬虫類、ジネズミの生息に影響を与えている例が知られている。

○被害をもたらす要因

(1) 生物学的要因

- 昼夜を問わず活動するため、採食能力が高い。
- 働きアリの攻撃能力が高く、他種のアリを排除し、競合する。
- 化学防御物質を利用しコロニーを保護するため、天敵や他種のアリからの防衛能力が高い。

○特徴ならびに近縁種、類似種について

- アジアには同属の他種は生息していない。発達した複眼と脚を持つ。触角柄節は長く、頭部後縁をはるかに越える。触角べん節はすべて幅より長さの方が長い。後胸は小さく退化して、中胸と明瞭に区別できない等の特徴で他のアリから区別できる。

○その他の関連情報

- IUCN の侵略的外来種ワースト 100 にリストされている。

○主な参考文献

(1) Holway, D. A., Lach, L., Suarez, A.V., Tsutsui, N. D., Case, T. J.(2002) The Causes and

Consequences of Ant Invasions. *Ann. Rev. Ecol. Syst.*, 33: 181–233.

(2) IUCN-ISSG. The Global Invasive Species Database (<http://www.issg.org/database/welcome/>)

ツヤオオズアリ (*Pheidole megacephala*) に関する情報

○原産地と分布： 南アフリカ原産と考えられている。現在はアルゼンチンからフロリダにかけてやニューカレドニアやガラパゴスなどの太平洋諸島に侵入している。

○定着実績： 日本では奄美以南の南西諸島に定着している。近年小笠原父島でも確認された。

○評価の理由

高い採餌能力と攻撃性による他種のアリとの競合・駆逐、捕食等による他の動物への影響が海外で知られている。日本でもすでに南西諸島に定着しており、在来の無脊椎動物に捕食や競合により大きな影響を及ぼすおそれがある。

○被害の実態・被害のおそれ

生態系に係る被害

- 捕食による直接的な影響で在来の無脊椎動物に深刻な影響を及ぼす。

○被害をもたらす要因

生物学的要因

- 昼夜を問わず活動するため、採食能力が高い。
- 兵アリを生産し、攻撃能力が高く、他種のアリを排除し、競合する。
- 大きなコロニーを形成し、しかも活発に活動するため、そのコロニーが生態系に与える影響は大きい。
- 攪乱された環境下のみならず、自然林内にも入りこみ優占種になることがある。

○特徴ならびに近縁種、類似種について

- オオズアリ属(*Pheidole*)は他に8種が日本に生息する。この属には働きアリに顕著な二型があり、大型のものを兵アリ、小型のものを働きアリと呼んでいる。本種は兵アリの頭部後方表面に彫刻がなく滑らかで光沢がある点、働きアリの頭部後縁は丸く前中胸背板が融合して単一の隆起を形成する点で日本産の他種と区別できる。

○その他の関連情報

- IUCN の侵略的外来種ワースト 100 にリストされている。

○主な参考文献

(1) Holway, D. A., Lach, L., Suarez, A.V., Tsutsui, N. D., Case, T. J.(2002) The Causes and

Consequences of Ant Invasions. *Ann. Rev. Ecol. Syst.*, 33: 181–233.

(2) IUCN-ISSG. The Global Invasive Species Database (<http://www.issg.org/database/welcome/>)